



# 10 Things your parrot wants you to know about behavior

## インコ・オウムがあなたに知ってほしいと願う行動に関する10の知識



ユタ州立大学 心理学部 S.G.フリードマン博士

自らを語ることさえ難しいのですから、他の種の動物の事となると、どうなるのでしょうか？行動分析学の分野からみた学習と行動の法則により、すべての動物のことを理路整然と説明できます。

近年、応用行動分析学を用いた指導技術が、広く知られ用いられるようになり、飼育下にあるインコ・オウム達の生活の質が大幅に向上しました。世話をする方々が知っている、すべてのインコ・オウム達が幸せになれる10の知識をご紹介します。

スーザン・G・フリードマン博士  
ユタ州立大学の心理学教授。  
過去10年以上、科学的に優れた指導技術と応用行動分析学の倫理的規範を動物に用いようと先駆者的努力を続けてきた。  
獣医師やその他動物のプロフェッショナル向けのものやペットオーナーのための、2つのオンライン・コース指導。  
世界各国で異種間ワークショップ開催。  
執筆した記事などはインターネット上で8か国語に翻訳されている。

【日本語訳：石綿美香】



この子は神経症？ホルモンの影響？怖がり？鳥を表現するレットテルには気をつけてください。代わりに目に見える行動を表現するようにします。

### 1 行動は、ある環境下でインコ・オウムがすること。 行動がインコ・オウムそのものではない。

あなたが、次にインコ・オウムを「・・・です」（例えば、凶暴、支配的、気が狂っている）などとレットテルを貼った表現をしようとする時、代わりに次の3つの質問に答えてみてください。レットテルをはったものを実際に目に見える行動で表すとどうなりますか？どういう状況で、この行動が起きますか？この行動をすることで、鳥が直後に得ているものは何ですか？

これらの質問への答えが、行動を変えるための明確な目標を定める事に役立ちます。行動を促す環境の中にあるきっかけと、どういった結果で行動が継続しているのかを特定します。例えば、「うちの鳥は凶暴です」という曖昧なレットテルではなく、「きっかけ—行動—結果」の見方をすると、どれだけの情報を得ることができるか見てみましょう。「私がケージの近くに手を出すと（きっかけ）、うちの鳥がつついて（行動）、私の手を遠ざけようとして（結果）」。単に「凶暴」では置き換えられません。なぜなら、これは単なるレットテルだからです。しかし「つつく」であれば、私たちがもっと頻繁に見たいと思うような代わりの行動に置き換えることができます。



インコ・オウムがいつも同じ結果を求めているとは限りません。頭をスクラッチされることが動機付けになる時もあるれば、ピーナッツがそれに変わる時もあります。

## 2 すべての行動は インコ・オウムの目的のため。 目的は行動がうみだす結果。

行動は、インコ・オウムが自分が望む結果を、環境の中(体の中の環境も含め)で生み出すためのツールです。ある行動をとる理由を知るには、行動の直後に何が起きているかに目をむけてください。結果は通常、ある物・事・状態を、得るもしくは避けるという、2つの項目に分けることができます。

昨日の行動が生み出した結果が、今日とる行動の動機となります。これは効果の法則と呼ばれており、行動はその結果の機能だと言われています。効果の法則は自然のフィードバック・ループを作ります。動物の視点からみて効果のある行動が繰り返され、効果のない行動は形を変えたり減っていくのです。たとえば、多くのインコ・オウムが執拗に大きな声を出しますが、これは、そうすることによって、(人間からのアテンションという)社会的な強化子を過去に得たからです。鳥は、叫び屋(スクリーマー)なのではなく学習者(ラーナー)です。

## 3 インコ・オウムは、 もっとも良い結果を生む行動を 自然に選ぶ。

選択肢を与えられれば、すべての動物が自分にとって最も良いものを選びます。これはマッチングの法則(対応法則)と呼ばれており、異なる行動(または異なる場

所での同じ行動)の相対比率は、それらが生み出す強化の相対比率に対応すると言われています。たとえば、ペリウィングル・パロットに、ジョンが手を出し、その手に乗った時は90%強化し、グレースの場合は40%だったとします。すると手に乗る割合が、ジョンの時は90%、グレースの時は40%となるわけです。この対応法則は、ヒトを含む多くの動物にみられます。代替行動の強化をすることで問題行動の起こる率を減らすという形で、この法則を応用していくことができます。こうして罰を与える戦略に逃げることなく問題を減らしていきます。

## 4 すべてのインコ・オウムは 個であり、行動の動機となる結果 にはそれぞれの視点を持つ。

強化子は、有形物、社会的な関わり、感覚経験、身体的活動、不快刺激からの回避などさまざまです。動物の生活の質は、日々の行動の動機となる強化率・質・多様性に関係しています。食べ物のように自然に強化子となるものもあります。その他は、既存の強化子と密接なペアリングを繰り返し経験することで学習されます。人間の手による接触は、食べ物など他の強化子とのペアリングにより学習された強化子となる一例です。新しい強化子を学習する能力というのは、自然の賢い戦略です。じっとしているよりも行動することに常に良い理由が約束されているのですから。

## 5 インコ・オウムの動機が何かを把握 するため、お気に入りの物・活動・人 などを注意深く観察する。

行動に続く結果が、行動頻度が増える効果をもつものを「強化子」といいます。それ自体が、結果の固定された特徴を表すものではありません。ある結果が、時間によって強化子となったりならなかったりするものもあります。ヒマワリの種は、シードをおなかいっぱい食べた鳥の動機にはならないし、一日中活発だった鳥に、人間の手は飛ぶ動機になりません。種の自然の歴史、個々の行動の歴史、そして現在オウムが暮らしている環境を知ることが、特定の鳥が何を動機としているかを把握する重要な鍵になります。最善のアプローチは仮定をしないことです。個々のインコ・オウムのニーズに関しては、一頭体を見極めることで、より深く理解できます。

## 6 良い強化子を迅速かつ一貫して 提供し、インコ・オウムの 良い行動を増やす。

効果の高い強化のために最も重要なのは、行動と強化子間の時間差が少ないことでしょう。インコ・オウムが反応を繰り返し、より多くの強化を得られるように、報酬となる結果を生んだ反応が何かを正しく伝えるには、良い強化子を迅速に提供することが最もわかりやすい手段です。報酬出現の遅れは、行動の流れの終わりのほうに起きている異なる反応の強化にもなりえます。一貫性も非常に大切です。その理由は「○○すれば―○○になる」の行動と結果の随伴性が明確に伝わるからです。もし止まり木に乗れば、頭をかいてもらえる。



Photo: © WPT

新しい行動に向けた小さな前進となる一歩にも注意をはらい、すぐさま強化子を出せる準備をしておきましょう。

## 7 無意識に問題行動を強化してしまう可能性について。

消去という過程により、強化されない行動は減っていきます。インコ・オウムが繰り返す行動はそのひとつひとつが毎回強化されています。これには、遊び場から外に出てしまう、好きではない手から逃れようとする、噛む感覚を楽しむことになる木製のモノ齧りなどの問題行動も含まれます。間欠的な強化は、熱心なギャンブラーがうまれるのと同じ仕組みで、困った行動のしっかりと定着することになります。注意を引くための叫び鳴きなどの問題行動をいったん学習してしまうと、その行動の維持に必要なのは、時たまのジャックポットだけということになります。

私たちの行う事が常にインコ・オウムの問題行動を強化しているわけではありません—他の鳥、子供、その他内面で起きていることも可能性としてあります。しかし、どんな場合でも、無意識の強化は、私たちが対処できる問題です。問題行動に対処する場合、もっとも答えやすい質問形式は、「このオウムはどうしたんだろう？」よりも「この行動を強化しているのはなんだろう？」です。行動が環境要素と機能的に関連していることがわかれば、行動を変えるために、効果的かつ人道的に、環境を変えることができます。

## 8 問題行動を避けるため、悪い行動ではなく、より容易かつ効果的に正しい行動が行えるように環境を調整する。

ときに、問題行動を解決するために、もっともポジティブかつ高圧的でない方法は、まずはじめに、その行動が起こる環境のきっかけを取り去ることで、たとえば、設備十分な遊び場を壁から離れたところに移動することで、インコ・オウムの窓をかじりたい欲を引き下げることができます。ケージ扉の内側に止まり木を取り付け、扉を開ける前にそこに立つことを教えれば、ケージの奥に入れた手を噛むことを減らしていけます。生活環境の中で、インコ・オウムにして欲しい行動をしてもらうための障害となる様々なものを見つけ出すには懸命に観察する必要があります。行動が起きている環境内ではなく、「鳥の内面」に探そうとすることで、多くの簡単な行動への答えを見逃してしまうのです。そのうえで、問題行動のもととなっていた強化子を取り除けば、もう効果的に強化子があらわれないので、その行動は減少していくのです。

## 9 最終目的となる行動に向かっての小さなステップも強化

まったく起きない行動を強化することはできませんが、インコ・オウムに新しい行動(またはすでに行っている行動の新しい形)を、

最終目標行動への小さなステップとして短時間で教えることはできます。この過程をシェイピングと呼びます。例えば、止まり木に乗りたがらないインコ・オウムに、以下のように徐々に完成に近い行動を繰り返し強化していくことにより、止まり木に乗ることを教えられます。止まり木の近くで落ち着いている;止まり木にほんの少し足先で触る;片足を止まり木に乗せる;片足を乗せたまま体重を止まり木方向に移す;最終的には両足を止まり木に乗せる。

上手にシェイピングが出来るのは、小さなそしてふだんからオウムがとる行動のバリエーションを観察することにたけている人です。ふだんからとる行動のバリエーションから、目標行動に向け、次に近い行動に気づき強化できるのです。どんな小さなものでも、素早いタイミングで強化しなければいけません。鳥が躊躇をみせる部分があれば、強化のための基準をさげて、それまでできていたステップに戻り、再び始めましょう。徐々に近づけていきます。

## 10 強化したものが残るので、インコ・オウムが良い子でいるタイミングを捉える

私たちは一般的に、良い行動よりも悪い行動に注意を払ってしまいます。実際には、同じくらいの注意力を、良い行動を起こしやすくしかも良い結果が得られるように環境の調整をする事に向ければ、短時間でよい結果が得られ長く続きます。問題行動を減らすには(結果として鳥への強化子が減る)、同時に増やしたい行動の目標を設定するというフェア・ペアの法則にしたがってください。こうすれば、毎日あなたのインコ・オウムが得られる強化の総量は守ってあげられます。

インコ・オウムが良い子でいるタイミングを捉えることは、あなたが望む行動を増やすだけでなく、鳥との関係を深めることができます。嫌悪刺激を避けるためでなく、価値あるものを得るという正当な理由のために正しい行動を選ぶ権利が、動物達にはあります。その結果、オウムは人間社会の中で共に幸せに生活することができるようになるのです。

